

2023～	ソーシャルワーク論	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	田中 尚	

■授業のテーマ

ソーシャルワーカーの実践力の向上に必要とされるソーシャルワーク理論

■授業の目的

ソーシャルワークの実践理論・モデルと実務・実践活動を結び付け、理論・モデルに基づく対象把握、実践を行えるようにさせる。

■授業の到達目標

- ・3つの対象レベル（個人・組織・地域）において、ソーシャルワークの実践理論に基づき、対象の統合的な理解・把握、アセスメントができる。
- ・ソーシャルワークの理論モデルと結び付けて、自身の実践の計画・振り返り・改善を行う。
- ・エコマップ等、視覚でとらえ、説明し相手にも理解させるカンファレンス等で使えるためのツールを身につける。
- ・自らの実践を説明し、相手の理解が得られるよう、実践の言語化等に関連するスキル等を身につける。

■授業の概要

ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成は一体的であり、一般的な「福祉教育」、教育機関による専門教育、実践現場での研修やスーパービジョンなどは、理論と実践の統合のうえで、重層的に行われている。また、今日のわが国においては、ソーシャルワークへの期待が新たな分野にも広がりを見せており、それらの領域でのソーシャルワークの展開が求められている。本授業では、履修者それぞれが自身の関心分野・領域を定め、それについてのソーシャルワークの文献等の調査を行い、実践力の向上と人材育成に焦点を当て、その歴史的経緯を検討するなどを通して、ソーシャルワーク実践の課題を考察する。さらに、ソーシャルワーク理論やその価値とするとところを確認し、実践上の現状とその課題を検討する。検討の枠組みとしては、ソーシャルワークの実践力の向上と人材育成の実践に関連する知識・技術の基盤となる自我心理学、認知・行動理論やエコシステム論など、ソーシャルワークの主要理論の適用などを検討する。また、ジェネラリスト・ソーシャルワークの理解を踏まえて、ミクロ・メゾ・マクロの各視点からのソーシャルワーク実践の理解を深め、価値を生み出すキーワードとして、社会構成主義の観点を取り上げ、実践を批判的に分析することを行う。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	ソーシャルワーク実践理論の理解がソーシャルワーカーの実践力の向上にどのようにつながるかを踏まえて、ソーシャルワーク実践の課題を考察する。	【提出期限】 <input checked="" type="checkbox"/> 対面授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input type="checkbox"/> その他 ()
課題 2 (事後課題)	ソーシャルワークの理論とその実践における課題、実践上のジレンマ（実践目標となる価値の実現と倫理的葛藤、ジレンマへの対応を含めて）について考察する。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリング

では「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

（2）アドバイス

課題1 アドバイス

授業の到達目標、概要などを読んで、レポートで取り組む内容をできるだけ絞ることが大切です（広すぎると与えられた文字数では、教科書レベルの内容をまとめただけになってしまいます）。また、大学から送られてくる文献だけでは求められるレポートの質に到達することが困難であることもあり、自身の関心に従ってレポート課題（テーマ）に関する文献を探し出す努力が必要です。大学からの文献は、そのためのガイドとして考えてください。

課題2 アドバイス

目標は、ソーシャルワーカーの実践力の向上とその実践現場（環境）についての検討・分析力を高めることにあります。それを意識して、ソーシャルワークの価値・倫理・理論・知識・技術（方法）についての具体的な理解を目指してください。ソーシャルワーク実践における理論と実践の統合、そのうえでの多様な葛藤、ジレンマなどについて、実際に実践・事例を検討・分析することを念頭に選んでください。

（3）在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容（・キーワード）	学びのポイント
1	ソーシャルワークおよび実践研究の基本的考え方	質的研究、量的研究、文献調査、参加観察、面接、アンケート、フィールドワーク、エスノグラフィ、研究倫理	ソーシャルワークにおける様々な研究方法があること、研究倫理の遵守が必須であることを理解する。社会福祉研究論文の幾つかを読み、研究論文の例として参考にする。
2	ソーシャルワークの全体像の理解：価値と倫理	ソーシャルワークにおける価値と倫理	ソーシャルワークが目指す価値とその実現を目指すうえでの実践上の倫理的課題について考察する。
3	ソーシャルワーク実践理論の全体像の把握と確認①	エコシステム理論	生態学的視点とシステム論について調べる。
4	ソーシャルワーク実践理論の全体像の把握と確認②	ジェネラリスト・アプローチの実践への適用	ミクロ・メゾ・マクロ、および各システムの相互作用について、実例を用いて考察する。
5	ソーシャルワーク実践理論の実践への適用①	認知・行動理論	認知・行動理論のソーシャルワークへの適用について理解する。
6	ソーシャルワーク実践理論の実践への適用②	精神分析・人間性心理学	精神分析的アプローチや人間性心理学のソーシャルワークへの適用について理解する。
7	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）①	大学等教育機関におけるソーシャルワーク教育	参考文献を中心に文献調査より、歴史、組織、カリキュラムなどについて調べる。
8	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）②	現場における育成・訓練	現場における学びの特徴、OJT、Off-JT、Self-Development、研修体制について調べる。
9	ソーシャルワーカーの育成（実践力の向上と実践環境）③	スーパービジョン	スーパービジョンの定義、種類、機能、プロセス、技術、倫理、体制について調べる。
10	ソーシャルワーカー育成の歴史・制度	資格制度、養成教育の歴史	わが国のソーシャルワークの資格制度、養成教育の現状と歴史を文献から学ぶ。
11	ソーシャルワーカーの実践力向上①	個人への介入	心理療法・カウンセリングの諸アプローチ・技術を意識する。
12	ソーシャルワーカーの実践力向上②	家族への介入	家族療法の視点からシステム論的思考のあり方を理解する。
13	ソーシャルワーカーの実践力向上③	組織への介入	社会構成主義の観点から現状を考察する。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
14	ソーシャルワーカーの実践力向上④	制度への介入	ミクロ・メゾ・マクロの相互関連性を理解する。
15	ソーシャルワーカーの養成・育成上の課題	ソーシャルワーク価値を基盤にした養成教育	ソーシャルワークサービスの質とソーシャルワーカーの実践力の向上との関連を理解し、ソーシャルワークが目指す価値の実現に基づき批判的に考察する。

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題(学修時間目安: 35時間以上)

- ・「在宅学修15のポイント」を包括的に学修し、それぞれまとめる。特に2の「ソーシャルワークの全体像の理解: 価値と倫理」について、自身で調べたことを1,600字程度にまとめる。(対面の演習の1週間前までに提出。)

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	ソーシャルワーク実践理論の全体像の把握と確認について、講義する。受講生は、ソーシャルワーク実践理論の把握と確認を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	ソーシャルワーク実践理論の歴史的変遷について、講義する。受講生は、ソーシャルワーク実践理論の歴史的変遷を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	ソーシャルワークの実践理論① 自我心理学のソーシャルワークへの適用を中心とした心理社会的アプローチについて、講義する。受講生は、心理社会的アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	ソーシャルワークの実践理論② ソーシャルワークの機能的アプローチの実践への適用について、講義する。受講生は、機能的アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	ソーシャルワークの実践理論③ ソーシャルワークの問題解決アプローチの実践への適用について、講義する。受講生は、問題解決アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	ソーシャルワークの実践理論④ 家族療法とソーシャルワークについて、講義する。受講生は、家族療法による家族システム理論を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	ソーシャルワークの実践理論⑤ 認知療法とソーシャルワークについて、講義する。受講生は認知理論のソーシャルワーク実践について理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
8	ソーシャルワークの実践理論⑥ 行動療法とソーシャルワークについて、講義する。受講生は行動理論のソーシャルワーク実践について理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
9	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、課題中心アプローチによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
10	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、生態学的アプローチによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
11	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、ジェネラリスト・アプローチによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
12	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、ケアマネジメントによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
13	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、ソーシャル・サポート・ネットワークによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習

	授業の内容	授業の方法
14	ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、エンパワメント・アプローチによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習
15	まとめ ソーシャルワーク実践理論の今後の展開について検討する。特に、構成主義・ナラティブによる実践に照らし検討する。受講生は、グループ討議を行いながら、理解を深め、実践への活用を図る。	対面の演習

(3) スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間以上）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート（15%）、課題2レポート（20%）
- ・スクーリング（事前課題15%、全スクーリング50%）

■参考文献（＊印＝大学から送付される必読図書）

- ＊1) 久保絃章・副田あけみ（2005）『ソーシャルワークの実践モデル』川島書店.
- 2) 日本社会福祉学会機関誌（最新版）『社会福祉学執筆要領「引用法」』（コピー）
- 3) 伊藤淑子（1996）『社会福祉職発達史研究：米英日三カ国比較による検討』ドメス出版.
- ※3) の図書は、新品在庫僅重版予定無しのため配本できませんが、非常に大切な内容ですので、中古を入手する、または図書館で借用するなどしてお読みください。
- 4) 好井裕明（2006）『「当たり前」を疑う社会学』光文社新書.
- 5) Schon, D. (1984) The reflective practitioner: how professionals think in action, Basic Books. (=2001, 佐藤&秋田訳『専門家の知恵』ゆみる出版.)
- 6) 小池和夫編（2006）『プロフェッショナルの人材開発』ナカニシヤ出版.
- 7) Polanyi, Michael (1996) The tacit dimension. Routledge & Kegan Pau. (=1980. 佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店.)
- 8) 金井壽宏（2012）『実践知』有斐閣.
- 9) Gergen, K. (1999) An invitation to social construction, Sage. (=2004, 東村知子訳『あなたへの構成主義』ナカニシヤ出版.)
- 10) Flick, Uwe (1995) Qualitative forschung. (=2002, 小田他訳『質的研究入門』春秋社.)
- 11) 平山尚他（1998）『社会福祉実践の新潮流』ミネルヴァ書房.
- 12) 太田義弘（1992）『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房.
- 13) 遊佐安一郎（1984）『家族療法入門：システムズ・アプローチの理論と実際』星和書店.
- 14) Toseland, R & Rivas, R. (1998) An introduction to group work practice (=2003, 野村豊子監訳『グループワーク入門』中央法規出版.)
- 15) Obholzer, A. & Roterts V. Z, (2006) The unconscious at work: individual and organization stress inhte human services, (=2014, 武井麻子監訳『組織のストレスとコンサルテーション』金剛出版.)
- 16) 高良麻子（2017）『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル』中央法規出版.
- 17) Goldstein & Noonan (1999) Short-term treatment and social work practice. Simon & Schuster,inc. (=2014, 福山和女他監訳『総合的短期型ソーシャルワーク』金剛出版.

2023～	子ども・家庭と女性福祉研究	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	竹之内 章代	

■授業のテーマ

子ども・家庭・女性の社会的課題について、歴史や社会福祉の理論やアプローチ等を踏まえ、ソーシャルワークの視点から考察する

■授業の目的

児童及びその家族の支援に関して、各種の基礎理論及びソーシャルワーク理論に基づくアプローチの方法等を学修し、実践に活用できるようにする。

■授業の到達目標

- ・理論の成り立ち、主要概念、方法論等について説明できる。
- ・理論・アプローチを踏まえて、自身の実践の省察、評価し、実践の改善課題等について説明できる。

■授業の概要

子どもの抱える課題は、おとなやおとな社会の縮図であり、子どもそのものの問題というよりも、その環境との関連で理解する必要がある。子どもに対する福祉は、社会福祉の歴史でも早くから対応の必要がいわれていた分野でもある。しかしながら、子どもを一人の人格を持った存在として「権利主体」として捉えられるようになるまでの歴史はまだ浅い。それらの歴史的経緯、社会や時代などの環境の変化は、子どもたちの福祉的課題に影響を及ぼしている。それらの考察をしつつ、現代的な課題について理解する。さらに、子どもを取り巻く環境である、家族やいまだ子育ての主体者とされる女性にも焦点をあてて、課題を考察していきたい。

子どもや家庭、女性が政策的な課題としても取り上げられている現在、その中でソーシャルワークを展開する意義やその役割について考えるとともに、ともすれば「家庭生活」、いわゆる「家事」「育児」「介護」などの問題は固定的な性別役割分業に未だに縛られており、それが福祉現場においてもだれでもできる仕事とされがちであることから「福祉労働」や「専門性」についても、再考していきたい。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	社会福祉の歴史的な展開を踏まえ、児童救済、児童保護、児童の人権と発展してきた歴史について概観したうえで、「子ども家庭福祉」の今日的課題をとりあげて、考察しなさい。(あるいは、女性福祉の史的展開を踏まえ、女性福祉の今日的課題を取り上げて、考察しなさい。)	【提出期限】 <input checked="" type="checkbox"/> 対面授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input type="checkbox"/> その他 ()
課題 2 (事後課題)	子ども家庭福祉と女性福祉における分野を一つとりあげて、社会福祉専門職の役割と意義の課題について論じなさい。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項

の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス

課題 1 アドバイス

社会福祉の歴史的な展開の理解と、子どもが歴史的にどのような存在であったのかを「権利」という切り口で学修してみてください。また、女性福祉に関心のある方は「売春防止法」が制定されるまでの娼婦の歴史と「困難問題を抱える女性への支援に関する法律」までの流れを踏まえて考えると良いでしょう。

課題 2 アドバイス

子ども家庭福祉や女性福祉の実践にかかわっている方は、自身の実践体験も踏まえて、考えてみると良いと思います。また、実践にかかわっていない方は、参考文献などの事例からどのような課題があるかを整理してみましょう。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	子ども家庭福祉の理念と考えかた	子どもにとっての生存権、子どもと環境	児童福祉から子ども家庭福祉となった転換点について学修する。子どもを理解するため発達心理などの理論を通じて学修する。
2	子ども家庭福祉の歴史 1	児童救済、小さなおとな	子ども家庭福祉のかかわりが「児童救済」から始まった歴史的経緯を学修する。
3	子ども家庭福祉の歴史 2	児童保護、子どもの救済の最優先	「児童救済」から「児童保護」に子どもの福祉的観点が変化したことや戦争時の子どもたちのおかれた状況について学修する。
4	子ども家庭福祉の歴史 3	子どもの権利、子どもの最善の利益	子どもの権利について、第二次世界大戦後から「子どもの権利条約」制定、それ以降の子どものとらえ方を学修する。
5	女性福祉の歴史 1	近代以前の女性の権利、近代以降の女性の権利、娼婦運動	女性の権利がどのような変遷を遂げてきたのかを近代以前とそれ以降の状況について「売買春」を軸に理解する。
6	女性福祉の歴史 2	売春防止法の制定、女性の権利、ジェンダー	戦後、売春防止法の制定までの歴史を学修するとともに、福祉がどのようにかかわってきたかを学修する。
7	女性福祉の現代的課題	DV、売買春、母子の貧困、「困難問題を抱える女性への支援に関する法律」	家庭内暴力、現代の売買春、母子家庭の貧困など現代的な女性福祉にかかわる課題について福祉とのかかわりで学修する。
8	子ども家庭福祉の制度と実施体制	児童福祉六法、実施体制	日本における子ども家庭福祉にかかわる法制度、サービス、実施主体、実施体制について学修する。
9	子ども家庭福祉にかかわる専門職	福祉、保健 / 医療、心理、教育、労働との関連	実際にどのような専門職が子どもや家庭に対してかかわり、どのような連携が行われているのかを学修する。福祉専門職としてのかわりの視点を理解する。
10	子ども家庭福祉の分野 1	子ども・子育て支援、保育	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野について、事例等を通して、ソーシャルワークの視点を支援について学修する。
11	子ども家庭福祉の分野 2	障がいがある子どもと家庭、母子保健	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野について、事例等を通して、ソーシャルワークの視点を支援について学修する。
12	子ども家庭福祉の分野 3	社会的養護、虐待	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野について、事例等を通して、ソーシャルワークの視点を支援について学修する。
13	子ども家庭福祉の分野 4	ひとり親家庭、子どもの貧困	キーワードとなっている子ども家庭福祉の分野について、事例等を通して、ソーシャルワークの視点を支援について学修する。
14	子ども家庭福祉の課題	子どもと環境、ソーシャルワークの視点	子どもを取り巻く環境を総括し、あらためてソーシャルワークの視点での支援のあり方や福祉専門職としての役割について再確認を行う。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
15	まとめ		子ども家庭福祉や女性福祉をソーシャルワークとの関連で整理し、研究課題を考える。 まとめとして、社会福祉の歴史的な展開を踏まえ、児童救済、児童保護、児童の人権と発展してきた歴史について概観したうえで『子ども家庭福祉』の今日的課題をとりあげて、考察しなさい(あるいは、女性福祉の史的展開を踏まえ、女性福祉の今日的課題を取り上げて、考察しなさい)。(「レポート課題」の課題1に相当)

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題(学修時間目安: 35時間以上)

「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、それぞれ800～1,200字程度にまとめる(対面の演習の1週間前までに提出)。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	子ども家庭福祉の理念について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の理念を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	子ども家庭福祉の史的展開について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	(2回に続き)子ども家庭福祉の史的展開について講義する。受講生は、子ども家庭福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	女性福祉の史的展開について講義する。受講生は、女性福祉の史的展開を学び、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	子ども家庭福祉及び女性福祉に関するソーシャルワークの理論やモデル、アプローチについて講義する。受講生は、その理論やモデル、アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	(5回に続き)子ども家庭福祉及び女性福祉に関するソーシャルワークの理論やモデル、アプローチについて講義する。受講生は、その理論やモデル、アプローチを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	子ども家庭福祉の分野における子育て支援、保育について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
8	子ども家庭福祉の分野における障がいがある子どもへの支援と母子保健について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
9	子ども家庭福祉の分野における虐待と社会的養護について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
10	子ども家庭福祉の分野におけるひとり親家庭と子どもの貧困について、理論や支援アプローチを用いた事例研究を行う。受講生は、グループワークを用い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習

(3) スクーリング事後課題(学修時間目安: 30時間以上)

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること(受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること)。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート(15%)、課題2レポート(20%)
- ・スクーリング(事前課題15%、全スクーリング50%)

■参考文献(*印=大学から送付される必読図書)

- *1) 山縣文治著『子ども家庭福祉論』ミネルヴァ書房、最新版

- ＊ 2) 杉本貴代栄編著『女性学入門－ジェンダーで社会と人生を考える 改訂版』ミネルヴァ書房、2018年
- 3) 柏女霊峰著『これからの子ども・子育て支援を考える』ミネルヴァ書房、2017年
- 4) 日本弁護士連合会子どもの権利委員会編『子どもの権利ガイドブック（第3版）』明石書店、2024年
- 5) 松本伊智郎編『「子どもの貧困」を問い直す－家族・ジェンダーの視点から』法律文化社、2017年
- 6) 児玉勇二『子どもの権利と人権保障－いじめ・障がい・非行・虐待事件の弁護活動から』明石書店、2015年
- 7) 林千代編『婦人保護事業 50年』ドメス出版、2008年
- 8) 日本弁護士連合会子どもの権利委員会編『子どもの虐待防止・法の実務マニュアル（第8版）』明石書店、2025年
- 9) 子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』明石書店、2000年
- 10) 荒巻重人ほか編『外国人の子ども白書（第2版）』明石書店、2022年
- 11) 相沢仁ほか『やさしくわかる社会的養護シリーズ1～7』明石書店、2014年
- 12) 滝川一廣ほか編『子どもの心をはぐくむ生活』東京大学出版会、2016年
- 13) 宮本みち子編『すべての若者が活きられる未来を』岩波書店、2015年
- 14) 宮本みち子編『下層化する女性たち』勁草書房、2015年
- 15) 日本弁護士連合会編『女性と労働』旬報社、2011年
- 16) 月刊福祉 my voice, my life 企画委員会編『My voice, My life 届け！社会的養護当事者の語り』全社協、2022年
- 17) 須藤八千代編『母子寮と母子生活施設のあいだ』明石書店、2007年
- 18) 日本子どもを守る会編『子ども白書』かもがわ出版 各年版、日本婦人団体連合会『女性白書』出版芸術社 各年版など

2023～	高齢者福祉研究Ⅰ	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	石附 敬	

■授業のテーマ

老いの諸相と高齢者支援の課題

■授業の目的

- 1) 社会老年学 (social gerontology) を中心とした老いに関する諸理論、超高齢社会の課題について学ぶこと。
- 2) 高齢者の生活を支える地域包括ケアシステムの理論と課題について学ぶこと。

■授業の到達目標

- 1) 老いに関する諸理論について理解し、身近な事例を題材に検討することができる。
- 2) 超高齢社会の課題について、考えを述べることができる。
- 3) 地域包括ケアシステムの理論と課題について述べることができる。

■授業の概要

日本の老年人口比率は29%を超え、4人に1人が高齢者となり、さらに男女ともに多くの人が人生80年以上を享受できる時代となった。一方で、家族機能の脆弱化、高齢者のみ世帯の増加など、高齢者を取り巻く環境は厳しさを増している。今後、人々が安心して高齢期を迎えることができるために、何が必要なのか？

本講義では、①まず初めに、社会老年学を中心とした老いに関する諸理論の学びを通じて、幸せに老いるためには何が重要なのかについて、身近な事例も活用して考えていく。②次に、人々がそれぞれ相応しい場所で老いていくこと (aging in place) を支える、地域包括ケアシステムの理論と現状について学ぶ。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	あなたが幸福だと思う身近な高齢者の人生を事例として、その方がなぜ幸せな老後を過ごしているのか、老いの諸理論を用いて考察してください。	【提出期限】 <input checked="" type="checkbox"/> 対面授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input type="checkbox"/> その他 ()
課題 2 (事後課題)	地域包括ケアシステムとは何か。そして、日本に導入された背景と、これまでの変遷について述べなさい。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス



高齢者（できれば後期高齢者が望ましい）に、その方の幼少期から高齢期までの人生を何回かに分けて（1回当たり1時間以内）聴いてみてください。ポイントはあなたの質問に対して、自由に語って

ただことです。聴きとった内容をもとに、その方の人生をオーラルヒストリーとしてまとめてください（これは提出の必要はありません）。これを事例として、レポートではオーラルヒストリーを簡潔にまとめて、老いの諸理論を活用して考察を述べてください。文中では個人が特定できないよう、仮名やアルファベット表記などで匿名としてください。高齢者の生の声を聴くことをお勧めしますが、該当する協力者が得られない場合は、高齢者の人生について書かれた書籍を事例として使用してください。



テキスト2)を丁寧に読んで、要点をまとめてください。また、厚生労働省のHPや参考文献なども参考にとすると良いでしょう。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	老年学とは	老年学の定義、テキストの構成	老年学はどのような学問であるか学ぶ。 【テキスト1)の序章】
2	老年学の研究方法	実証研究のプロセス、文献レビュー、量的・質的研究	老年学の研究方法について学ぶ。 【テキスト1)の第1章】
3	老いと社会	老年社会学の理論、高齢期の社会関係、エイジズム、社会参加	老年社会学の理論と、高齢期の社会関係について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。【テキスト1)の第4章】
4	老いと健康	老化と寿命、老化にともなう身体の変化、高齢期の傷病	老化にともなう身体の変化、高齢期の傷病の特徴について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。【テキスト1)の第2章】
5	老いと心理	生涯発達、感覚、記憶、孤独、コミュニケーション	老化と障害発達、感情と孤独、について学び、高齢者や家族への支援との関連性について考察する。 【テキスト1)の第3章】
6	高齢者と家族への支援、死生学	高齢者と家族を支える制度、福祉の実践方法、死生学	高齢者と家族を支える制度と支援方法について学ぶ。【テキスト1)の第5、6章】
7	事例検討①	オーラルヒストリー	あなたが幸福だと思う身近な高齢者に、幼いころから今までの人生について話を聴いてみてください。そして、老いの諸理論を用いて、その方がなぜ幸福でいるのか、高齢者やその家族への支援を展開する上での視点について考察してください。身近に対象者がいない場合は、高齢者の人生が書かれた書籍を読んで考察してください。
8	事例検討②	オーラルヒストリー	つづき
9	地域包括ケアシステムの背景	日本の現状と背景	地域包括ケアシステムに関して、日本の現状と背景について学ぶ。 【テキスト2)第1章】
10	地域包括ケアをめぐる議論①	integrated care、定義	地域包括ケアの重要な理論である integrated care とチームアプローチについて学ぶ。【テキスト2)第2章1節】
11	地域包括ケアをめぐる議論②	2006年モデル、2012年モデル	日本における地域包括ケアシステムの変遷についてまとめてください。 【テキスト2)第2章2節】
12	地域包括ケアシステム構築の方法①	諸外国の例	諸外国の例を基に、地域包括ケアシステム構築の方法について学ぶ。 【テキスト2)第3章1節】
13	地域包括ケアシステム構築の方法②	日本の例	日本の例を基に、地域包括ケアシステム構築の方法について学ぶ。 【テキスト2)第3章2節】
14	地域包括ケアシステムの課題①	認知症高齢者の在宅支援	地域包括ケアシステムの課題について学ぶ。 【テキスト2)第4章1節】
15	地域包括ケアシステムの課題②	ケアマネジメント、評価体制	地域包括ケアシステムの課題について学ぶ。(つづき) まとめとして、あなたが幸福だと思う身近な高齢者の人生を事例として、その方がなぜ幸せな老後を過ごしているのか、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを用いて考察する(「レポート課題」の課題1に相当)。【テキスト2)第4章2～3節】

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題（学修時間目安：35時間以上）

「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、その内容をA4・3枚程度にまとめる（対面の演習の1週間前までに提出）。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	本科目の概要、学修の進め方、事例研究の方法について共通理解を図る。受講生は、本科目の概要等を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	日本の社会の高齢化の現状と諸課題について講義する。受講生は、日本の社会の高齢化の現状と諸課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	老年社会学の理論、高齢期の社会関係、高齢期の諸課題について講義をする。受講生は、老年社会学の理論、高齢期の社会関係、高齢期の諸課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	老いの総合的理解、オーラルヒストリーを基にして講義する。受講生は、老いの総合的理解、オーラルヒストリーを理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	高齢者保健福祉の発展過程について講義する。受講生は、高齢者保健福祉の発展過程を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	地域包括ケアシステムとその課題について講義する。受講生は、地域包括ケアシステムとその課題を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	各自取り組んだオーラルヒストリーを素材にした対象高齢者の事例を基に、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを活用した考察、高齢者と家族への支援の課題について発表、グループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
8	（7回に続き）各自取り組んだオーラルヒストリーを素材に対象利用者の事例を基に、老いの諸理論、ソーシャルワーク理論・アプローチを活用した考察、高齢者と家族への支援の課題について発表、グループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
9	各自の居住地域の地域包括ケアシステムの現状と課題について統合理論とチームアプローチに関連付けた考察を基に、発表とグループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習
10	（9回に続き）各自の居住地域の地域包括ケアシステムの現状と課題について統合理論とチームアプローチに関連付けた考察を基に、発表とグループディスカッションを行い、理解を深め、実践活用を図る。	対面の演習

(3) スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間以上）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート（15%）、課題2レポート（15%）
- ・スクーリング（事前課題15%、全スクーリング50%）

■参考文献（*印＝大学から送付される必読図書）

- *1) 杉澤秀博、長田久雄、渡辺修一郎、中谷陽明編著『老年学を学ぶ 高齢社会の学際的研究』桜美林大学出版会、2021年
- *2) 筒井孝子著『地域包括ケアシステム構築のためのマネジメント戦略』中央法規、2014年
- 3) Robert C. Atcheley & Amanda S. Barusch (2004) Social Forces and Aging: An Introduction to Social Gerontology 10th ed. Thomson Learning. (= 2005, 宮内康二編訳『ジェロントロジー～加齢の力学～』きんざい.)
- 4) 筒井孝子著『地域包括ケアシステムの深化』中央法規、2019年

2023～	障害者福祉研究Ⅰ	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	三浦 剛	

■授業のテーマ

ソーシャルワーク理論に基づく「障害者福祉（障害者支援）」研究

■授業の目的

ソーシャルワークの視点から障害者福祉を整理検討し、ソーシャルワーク理論に基づくアプローチの方法を学び、実践活用にも結びつけられるようになることを目的とする。

■授業の到達目標

- ・ソーシャルワークの枠組みを理解し、障害者福祉領域での諸問題を解決するための研究方法を修得する。
- ・基礎的なソーシャルワーク研究方法を習得し、障害者福祉研究のデザインをすることができる。

■授業の概要

「障害者福祉」とは障害がある方への支援施策の全体をさすことばとして使われてきたが、その一領域であるソーシャルワークは、この分野で未だに明確な固有性を示せていない。ここではソーシャルワークの視点からその歴史的展開や理念についてとらえ直し、障害がある人にかかわるソーシャルワークの意味と価値を考える。つぎにソーシャルワーク理論からそのアプローチについて分析、検討し、ソーシャルワーク・モデルを開発する。その枠組みからこれまでの施設入所などの支援を分析し、その方法、技術について再考する。

障害がある人たちへのソーシャルワークのもう一つの課題として、重度の障がいがある人をどうとらえるかがある。アドボカシー、意思決定支援と社会貢献の視点から、実践活用にも結びつくように、直接的支援のあり方や質に関する議論も進めていきたい。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	障害者支援の史的展開を踏まえ、ソーシャルワークとの接点を確認し、障害がある人へのソーシャルワーク・アプローチによる支援モデルを考える。	【提出期限】 <input checked="" type="checkbox"/> 双方向対面授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input type="checkbox"/> その他 ()
課題 2 (事後課題)	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際について、支援方法や支援システムを、開発し、そのプロセスや評価法についても具体的に述べる。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス

課題1 アドバイス

「在宅学修15のポイント」を参考に、障害の概念、障害者支援の史的展開に関する基礎的な知識を学修しておいてください。そして、ソーシャルワークの枠組み（視点・モデル・アプローチ）に関する基礎知識を確認し、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際について、事例研究などを通し具体的なイメージがもてるよう学修してください。

課題2 アドバイス

スクーリングでの学びを踏まえ、ソーシャルワークの視点から障害者支援の枠組みを示してみる。そして、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際（プロセス、評価ポイントなど）から、ソーシャルワーク・アプローチによる支援モデルを構築してみる。その際には、支援システムによる多機関連携やチームアプローチについても視点を置く必要がある。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	生活困窮と障害	遺棄、虐待、働けない貧民、生存権	生存権の確認(20世紀初頭)までの障害がある人のおかれた環境について学修する。
2	人権と障害	人権思想 リハビリテーション	人権思想の興りから第二次大戦後までの展開について学修する。
3	保護偏重の施策について	大規模施設、コロニー、分離処遇など	北欧やアメリカでの施設の大規模化、保護偏重化への過程を分析し、学修する。
4	ノーマライゼーションの理念	1959年法 脱施設、施設解体	保護偏重に対するノーマライゼーション理念の興りとアメリカでの展開について学修する。
5	「自立」概念の拡大	IL 運動、消費者主義	IL (independent living) 運動が自立の概念を拡大していく過程を学修し、障害学への展開にも触れる。
6	地域支援と契約制度について	社会福祉法、契約制度、応益負担	日本を中心に近年の制度動向についてキーワードを中心に学ぶ。
7	ソーシャルワークの歴史	社会問題、ケースワーク	障がいの問題を社会問題ととらえ、人と環境の相互作用を視点にソーシャルワークとの関連性を学ぶ。
8	ソーシャルワークの枠組み	生態学的視点、生活モデル、環境調整、エンパワメント	ソーシャルワークの視点、モデル、アプローチについて学び、ICF との親和性を中心に、障害者支援におけるソーシャルワークの意味を知る。
9	ソーシャルワークの視点について(エンパワメント、アドボカシーの概念)	アドボカシー、エンパワメント、ストレングス	近年、障害者福祉の中心的概念となったアドボカシーとエンパワメント、ストレングスについて学ぶ。
10	ソーシャルワークの展開について(1)	ミクロ・レベルからマクロ・レベルへの連続体、生物・心理・社会モデル、障害受容、家族支援、SST、認知行動療法など	人と環境との相互作用が、個人、家族、地域、制度などのレベルへ連続していることと、その支援展開の実際を学ぶ。
11	ソーシャルワークの展開について(2)	社会資源開発、ネットワーク形成、チームアプローチ、コーディネーション	障害がある人の地域支援活動に必要な、ソーシャルワークの開発機能について、基礎知識、方法を学ぶ。
12	ソーシャルワークの展開について(3)	ソーシャル・アクション、ネゴシエーション	開発機能が必要とされる関連技術の基礎知識と方法を学ぶ。
13	ソーシャルワークの展開について(4)	ケアマネジメント、障害者相談支援事業	障害者支援の実際をケアマネジメント・プロセスに沿って理解する。
14	ソーシャルワーク実践活用へ向けて	事例研究法	ソーシャルワーク実践における障害者支援の実際について事例研究を中心に学び、実践活用の方法を考える。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
15	まとめ		ソーシャルワークと障害者支援の関連性を明確にし ながら、ソーシャルワークの枠組みを通して障害者 支援を再構築してみる。まとめとして、「障害者支 援の史的展開を踏まえ、ソーシャルワークとの接点 を確認し、障害がある人へのソーシャルワーク・ア プローチによる支援モデルを考える」(「レポート課 題」の課題1に相当)

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題 (学修時間目安：35時間以上)

「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、それぞれにまとめる(同時双方向演習の1週間前までに提出)。
全体で4,000字程度にまとめる。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	障害がある人へのかかわりの歴史と障害概念の変遷と近年の到達点(ICFの考え方、差別禁止の方向性、障害学の展開など)について講義する。受講生はその歴史と障害概念を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	障害者支援におけるソーシャルワーク・アプローチの起源について及びソーシャルワークの理論と枠組み(生態学的視点、生活モデル、一般システム理論など)について講義する。受講生はソーシャルワークの歴史的展開を理解し、その起源と障害者支援の関連性に着目し、またソーシャルワークの視点、モデル、アプローチと障害者支援の関連性を把握し確認テストに解答する。	オンデマンド
3	障害者支援におけるソーシャルワークの視点(アドボカシー、エンパワメント、ストレングス)について講義する。受講生はアドボカシー、エンパワメントといったソーシャルワークの視点が、障害者支援にどのように具体化するかなどを理解した上で、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	障害者支援におけるソーシャルワークの展開(障害受容、SST、認知行動療法、家族システムズなど)について講義する。受講生は、障害児者への直接的支援として、その方法を具体的に理解した上で、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	障害者支援におけるソーシャルワークの展開(意思決定支援)について講義する。受講生は意思決定支援の意味、意義を理解した上で、その具体的実践方法について検討し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	障害者支援におけるソーシャルワークの展開(社会資源開発、チームアプローチ、多機関連携と地域支援システム)について講義する。受講生はチームアプローチなどの方法を具体的に理解し、その実践方法を検討し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	ソーシャルワーク理論・アプローチによる支援の実際(生活支援、ケアマネジメント)について、提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
8	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用(働くこと、日中活動への支援)について、提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
9	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用(発達すること、学ぶことへの支援)を提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習
10	ソーシャルワーク・アプローチによる支援の実際と活用(支援システム、地域自立支援協議会など)を提示する事例に照らし検討する。その際にはグループワークやロールプレイを用い、理解を深め、実践活用を図る。	オンラインによる 同時双方向演習

(3) スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間）

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること。（受講した年度の1月までに提出。当年度の締切日を確認すること）。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート（15%）、課題2レポート（20%）
- ・スクーリング（事前課題15%、全スクーリング50%）

■参考文献（*印＝大学から送付される必読図書）

- 1) 中野敏子『社会福祉学は「知的障害者」に向き合えたか』高菅出版、2009年
- 2) M. オリヴァー著 野中猛・河口尚子訳『障害者にもとづくソーシャルワーク』金剛出版、2010年
- 3) C.A. ラップ R.J. ゴスチャ著 田中英樹訳『ストレングスモデルー精神障害者のためのケースマネジメント』金剛出版、2008年
- 4) L.C. ジョンソン S.J. ヤンカ著 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房、2004年
- 5) 岩田正美『社会的排除ー参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣、2008年
- 6) 久保紘章・副田あけみ『ソーシャルワークの実践モデルー心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店、2005年
- 7) 狭間香代子『社会福祉の援助観ーストレングス視点／社会構成主義／エンパワメント』筒井書房、2001年
- 8) 横須賀俊司・松岡克尚『障害者ソーシャルワークへのアプローチーその構築と実践におけるジレンマ』明石書店、2011年
- * 9) 山下香『ソーシャルワークマインドー障害者相談支援の現場からー』瀬谷出版、2018年

2023～	福祉プログラム開発と評価 ～サービス改善のための実践評価と実践研究の方法～	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	大石 剛史	

■授業のテーマ

実践現場の課題を見直し、課題解決のために取り組む支援サービスを、より質の高い効果的なものへと改善するために用いる「(福祉) プログラム開発と評価」の方法を習得し、実践現場に適用する。

■授業の目的

- ・受講者が関わる（あるいは関心をもつ）実践の課題に対して、実践の経過、判断や行動の根拠、成果と課題等について、「(福祉) プログラム開発と評価」の方法を用いて客観的に記述・言語化し、検証するための方法を身に付ける。
- ・社会福祉課題解決のために有効なサービスを生み出し、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な「プログラム開発と評価」の科学的な方法論を学び、実践の現場に適用させる。

■授業の到達目標

- ・受講者が関わる実践現場の課題に対して、自身の実践の経過、判断や行動の根拠、成果と課題等について、「プログラム開発と評価」の観点から整理して記述し、理論的に説明できる。
- ・受講者自身の実践について、科学的な「プログラム開発と評価」の方法を用いて評価し、評価から得た知見や示唆を説得力ある方法で発表できる。
- ・「プログラム開発と評価」の具体的な方法について、①ニーズ評価、②理論評価、③プロセス評価、④アウトカム・インパクト評価、⑤効率性評価、それぞれについて理解し、説明できる。

■授業の概要

- ・【1-1】社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の意義と方法論を「プログラム開発と評価」の観点から概説する。
- ・【1-2】スクーリングで前項の質疑応答を行い、理解と知識を深める。受講生が関心を持つ実践現場の課題を共有し、「プログラム開発と評価」の観点から整理し、検討するグループワークを行う。
- ・【2-1】「プログラム開発と評価」の具体的な方法を、①ニーズ評価、②理論評価、③プロセス評価、④アウトカム・インパクト評価、⑤効率性評価、それぞれについてテキスト教材とオンデマンド授業で概説する。同時に①～⑤を、《1》制度の狭間問題への対応～効果モデルの設計・開発、《2》成果の上がらない制度モデルの改善・再設計、《3》効果モデルの形成・改善、エビデンス生成、《4》海外で効果立証された EBP プログラムの導入という課題に適用させる方法を提示する。
- ・【2-2】スクーリングで質疑応答を行い、理解と知識を深める。受講生が関心を持つ実践現場の課題解決にどのように活用すれば良いのか、受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて整理する。
- ・【3】受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、その課題解決に有効な研究計画・評価計画を作成する。スクーリングでは、その研究計画・評価計画を全体発表・共有して、意見交換する。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1 (事前課題)	社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の方法論である「プログラム開発と評価」を、受講生が関心を持つ実践現場の課題にどのように当てはめれば良いのか、A4用紙2～3枚にまとめて、事前提出をする。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面（双方向）授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面（双方向）授業前日まで <input checked="" type="checkbox"/> その他 (第2回リモートスクーリング1週間前まで)
課題 2 (事後課題)	受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、課題解決に有効な「福祉プログラム開発と評価」の方法を用いて作成する「事業企画書」「評価計画書」、ならびに「事業企画」に関わる評価ツールを最後のスクーリングに合わせて提出し、参加者に報告して質疑応答する。提出物は意見交換の結果を踏まえて改訂して提出する。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面（双方向）授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス



動画教材やテキストでは、「プログラム開発と評価」を用いて「効果モデル」を設計・開発、形成・改善する方法を、評価ツール《1》～《6》の開発と活用法の観点から概説します。その方法を実践現場にどのように当てはめれば良いかを考えてください。



動画教材やスクーリングにおいて、課題解決に有効な「福祉プログラム開発と評価」の方法を用いた「事業企画書」「評価計画・研究計画書」を、実践に基づいて作成する方法をお伝えし、スクーリングのグループワークで事前検討することにします。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	総論1：プログラム開発と評価とは	定義、二つの目的・アプローチ、評価者の立ち位置	授業の概要【1-1】福祉プログラム開発と評価の方法の概説を行う
2	総論2：評価の5階層	社会プログラムの設計・開発、形成・改善、実施・普及の方法	同上【1-1】社会プログラムの設計・開発、形成・改善、実施・普及の具体的方法を評価5階層の視点から概説
3	総論3：プログラム理論とロジックモデル	プログラムゴールとインパクト理論、プロセス理論	同上【1-1】社会課題解決の方法である社会プログラムの設計図であるプログラム理論・ロジックモデルについて概説
4	各論1-1：制度の狭間問題への対応～効果モデルの設計・開発（その1）	制度の狭間問題のニーズ把握、背景要因、ターゲット集団、対応の好事例分析	同上【2-1】《1》ニーズ評価、理論評価の活用方法を概説する
5	各論1-2：同上（その2）	プログラムスコープの構造、分析の方法、プログラム理論構築の方法	同上【2-2】《1》ニーズ評価の結果をまとめる方法として「プログラムスコープ」の活用方法を学ぶ
6	各論1-3：同上（その3）	各実践現場におけるプログラム理論・ロジックモデルの活用方法	同上【2-2】《1》各実践現場の課題解決の方法に対して、プログラム理論・ロジックモデルを活用する方法を学ぶ
7	各論2-1：成果の上がらない制度モデルの改善・再設計（その1）	成果の上がらない制度モデルの課題分析、ニーズ把握、背景分析、ターゲット集団分析、対応の好事例分析	同上【2-1】《2》ニーズ評価、理論評価の活用方法を概説する

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
8	各論2-2: 同上 (その2)	各実践現場におけるプログラムスコープ分析、プログラム理論・ロジックモデルの活用方法	同上【2-2】《2》ニーズ評価の結果をまとめる方法として「プログラムスコープ」の活用方法、プログラム理論・ロジックモデルを活用する方法を学ぶ
9	各論3-1: 導入した効果モデルの形成・改善、エビデンス生成 (その1)	導入した効果モデルの形式的評価、効果的援助要素、フィデリティ尺度、アウトカム評価との相関分析	同上【2-1】《3》導入した効果モデルのプロセス評価、アウトカム評価の活用方法を概説する
10	各論3-2: 同上 (その2)	各実践現場の課題に対応した効果モデル、効果的援助要素、フィデリティ尺度の構築、モニタリング評価の方法	同上【2-2】《3》導入した効果モデルの形成・改善評価の方法、エビデンス生成方法を、各実践現場の実情に合わせて検討する
11	各論4: 海外のEBPプログラムの導入とインパクト評価、効率性評価、実施・普及評価	導入した海外のEBPプログラムの技術移転の方法、アウトカム・インパクト評価、フィデリティ評価の方法	同上【2-1】《2-2】《4》導入した海外のEBPプログラムの技術移転、実装の方法を概説する
12	各論5-1: 各実践現場における評価計画の策定 (その1)	評価の計画、データの収集・分析の方法、質的データの分析方法、量的データの分析方法	同上【3】質的・量的データの収集・分析の方法を含めた評価計画の策定方法を概説する
13	各論5-2: 同上 (その2)	各実践現場における評価計画の策定方法、企画書の作成方法	同上【3】各実践現場における評価計画の策定方法、企画書の作成方法を学ぶ
14	成果の報告1: 研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告 (その1)	評価の計画、評価結果のまとめ・伝達と活用	同上【3】検討の結果まとめた研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告。全体討論を行う
15	成果の報告2: 研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告 (その2)	評価の計画、評価結果のまとめ・伝達と活用	同上【3】検討の結果まとめた研究計画・評価計画を企画書にまとめて報告。全体討論を行う

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題 (学修時間目安: 40時間以上)

社会福祉課題解決のために有効なサービスを生みだし、既存サービスをより質が高く、効果的なものへと改善するために必要な実践研究の方法論である「プログラム開発と評価」を、受講生が関心を持つ実践現場の課題にどのように当てはめれば良いのか、A4用紙2～3枚にまとめて、第2回リモートスクーリング1週間前までに、事前提出をする。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	在宅学修15ポイントの1の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
2	在宅学修15ポイントの2の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
3	在宅学修15ポイントの3の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
4	在宅学修15ポイントの1-3に関する解説と質疑応答	リモート授業
5	在宅学修15ポイントの4の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
6	在宅学修15ポイントの5の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
7	在宅学修15ポイントの6の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
8	在宅学修15ポイントの4-6に関する解説と質疑応答、各自課題に関する演習、ワークショップ、意見交換	リモート授業
9	在宅学修15ポイントの7の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
10	在宅学修15ポイントの8の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
11	在宅学修15ポイントの9の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド
12	在宅学修15ポイントの10-11の動画配信とコメント票でのフィードバック	オンデマンド

	授業の内容	授業の方法
13	在宅学修15ポイントの7-11に関する解説と質疑応答、各自課題への評価計画に関する演習、ワークショップ、意見交換	リモート授業
14	在宅学修15ポイントの12-15に関する成果の報告①	対面・リモート授業
15	在宅学修15ポイントの12-15に関する成果の報告②	対面・リモート授業

(3) スクーリング事後課題（学修時間目安：30時間）

受講生が関心を持つ実践現場の課題に当てはめて、課題解決に有効な「福祉プログラム開発と評価」の方法を用いて作成する「事業企画書」「評価計画書」、ならびに「事業企画」に関わる評価ツールを最後のスクーリングの折に提出し、参加者に報告して質疑応答する。提出物は意見交換の結果を踏まえて改訂して提出する。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート（20%）、課題2レポート（20%）
- ・スクーリング（参加度30%、プレゼンテーション30%）

■参考文献（*印=大学から送付される必読図書）

- *1) 大島巖、源由理子、山野則子、賛川信幸、新藤健太、平岡公一編著『実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法～CD-TEP法：協働によるEBP効果モデルの構築』日本評論社、2019
- 2) 源由理子、大島巖編（山谷清志監修）『プログラム評価ハンドブック～社会課題解決に向けた評価方法の基礎・応用』晃洋書房、2020
- 3) ピーター・H・ロッシ、マーク・W・リプセイ、ハワード・E・フリーマン（大島巖、平岡公一、森俊夫、元永拓郎 監訳）『プログラム評価の理論と方法～システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド』日本評論社、2005
- 4) 大島巖『マクロ実践ソーシャルワークの新パラダイム～エビデンスに基づく支援環境開発アプローチ：精神保健福祉への適用例から』有斐閣、2016
- 5) 古屋龍太、大島巖編著『精神科病院と地域支援者をつなぐ みんなの退院促進プログラム～実施マニュアル&戦略ガイドライン』ミネルヴァ書房、2021

「特別研究講義Ⅱ（TFU 実学臨床研究セミナー）」は2026/1/26時点のシラバスです。確定版は後日公開予定。

特別研究講義Ⅱ (TFU 実学臨床研究セミナー)	単位数	時間数	履修方法	配当学年
	2 単位	22.5 時間	SR	1・2 年
	担当教員	単位認定者 総合福祉学研究科長		

■授業のテーマ

「多様性をいきる ～利用者主体を地域で支える～（仮）」

これまでの「実学臨床研究セミナー」では、包摂（インクルーシブ）社会を考え、「包摂」の妨げとなる「格差」に対する実践について考えてきた。そこでは財や能力の違いが、個の責任と考えられ、排除のきっかけとなることが明らかになった。このような排除が起こるのはひとり一人違いが、環境によって受け容れられない時、すなわち多様性が認められない、硬直化した視点が依然として存在するからであろう。

今年度のセミナーでは、社会福祉、保健・医療、教育等の実践家と当事者が、個と環境の相互作用に着目し、多様性が受け容れられる社会をつくるためにはどうしたら良いかを議論するため、この年間のテーマを設定した。

■授業の目的

- ・ 個の違いが障害や排除として現れてしまう機序（メカニズム）、社会、環境の構造を理解する。
- ・ その視点から、障害、排除の解決へ向けた各分野からの取り組みを学ぶ。

■授業の到達目標

- ・ 現代社会の障害、排除の機序と構造を説明することができる。
- ・ 障害や排除の解決を目指した各分野からの取り組みを理解し、ウェルビーイングを実現する包摂社会をつくるための方法を具体的にイメージすることができる。

■授業の概要

障害、社会的排除の現状やその課題を解決するためおこなわれている様々な分野での取り組みを、月 1 回開催される「TFU 実学臨床研究セミナー」で、各分野の講師がリアルタイムに展開するとともに、計 3 回の対面、オンラインによる授業を実施し、受講の準備、確認、まとめを行い、現代社会の格差、階層から生じる課題とその解決方法の理解を進め、実学臨床研究の視点、視座などについても確認する。

■レポート課題

課題 1 (事後課題)	障害、排除の機序と構造を説明し、そこへの取り組みについて、セミナーから学んだことをまとめてください。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業 1 週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input checked="" type="checkbox"/> その他 (12 コマめ受講後提出可、 <u>提出期限</u> 1 月末日必着。)
----------------	--	---

■スクーリング授業計画（予定）

（「TFU 実学臨床研究セミナー」のテーマは仮、予定が変更される場合もある）

下記 15 回の授業のうち【オリエンテーション】【これまでの振り返り】【まとめ】の 3 回以外は、「TFU 実学臨床研究セミナー（全 12 回）」を受講します。開催日は TFU 実学臨床研究セミナー実行委員会の設定する日程での受講が必要となります。※現時点で日程・担当者等は未定。4 月初旬に送信するメールに沿ってセミナーを要申込必要。

	授業の内容	授業の方法
1	【オリエンテーション】 セミナーを受講するにあたって学修目標の設定などの準備をする	対面およびオンライン、 あるいはオンデマンド 教材による授業
2	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 1 回 総論 多様性とは	対面、オンライン、オン デマンド
3	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 2 回 当事者主体と意思決定 1・障がいがある人	〃
4	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 3 回 当事者主体と意思決定 2・子どもへの支援	〃
5	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 4 回 地域生活と包括ケア・多職種連携	〃
6	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 5 回 実践研究の「種」①現場（関連法人や協定法人）での「実践上の問い （種）」と研究の視点	〃
7	【これまでの振り返り】 これまでのセミナーを振り返りまとめを行い、以降のセミナーでの学修 目標を考える	対面、オンライン
8	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 6 回 コラボレーション企画 職能団体とのシンポジウム	〃
9	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 7 回 ”当事者主体” “住民主体”を支える～ケアリングコミュニティづくり	〃
10	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 8 回 博士課程教員らによる年間テーマに基づく研究紹介・報告	〃
11	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 9 回 実践研究の「種」②現場（関連法人や協定法人）での「実践上の問い （種）」と研究の視点	〃
12	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 10 回 未定	〃
13	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 11 回 未定	〃
14	「TFU 実学臨床研究セミナー」2026 年度第 12 回 【総括シンポ】格差問題への福祉実践からのアプローチ	〃
15	【まとめ】 セミナー全体を振り返り、目標の達成状況を整理する	対面、オンライン

■評価の方法・基準

- ・「TFU 実学臨床研究セミナー」への出席と各回の課題の提出（5%×12）
- ・事後課題レポート（40%）

■参考文献

各担当講師作成の資料等

2023～	生活困窮者支援と貧困研究	単位数	履修方法	配当学年
		2単位	SR	1・2年
		担当教員	阿部 裕二	

■授業のテーマ

貧困と低所得の意味を踏まえながら、多様化・複雑化する対象者に対する支援の方法を考える

■授業の目的

貧困（未就労、低所得、失職、借金、税・社会保険料滞納）とその固定化に対する支援について学ばせる。

■授業の到達目標

労働問題及び格差等の背景と実態を把握し、制度等を活用しながらソーシャルワークを展開できる。

■授業の概要

現代社会において、貧困・低所得といっても一様ではない。貧困概念の拡大を踏まえ、現代の貧困・低所得の現状とその原因・背景を理解するとともに、各種自立に向けた支援の実際について検討する。その際、多職種・多機関の連携を視野に入れながら進める。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	格差の意味や多様化する貧困概念の拡大を踏まえ、現行の支援の諸施策の概要と対応の限界について述べなさい。	【提出期限】 <input checked="" type="checkbox"/> 対面授業1週間前まで <input type="checkbox"/> 対面授業前日まで <input type="checkbox"/> その他 ()
課題 2 (事後課題)	スクーリングにおいて取り上げた貧困・生活困窮者の「世帯」を一つ取り上げ、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の枠組みと支援の際の留意点について述べなさい。	【提出期限】 <input type="checkbox"/> 対面授業後1ヶ月以内 <input checked="" type="checkbox"/> 受講年度の最終レポート受付日まで <input type="checkbox"/> その他 ()

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス

課題 1
アドバイス

格差にはさまざまな格差が存在するが、格差の根底には「貧困・生活困窮」があることを理解するとともに、絶対的貧困から拡大する貧困概念の把握が重要である。その上で、ライスセーフティネット（第3のセーフティネット）に位置づけられる生活保護制度など、重層的な生活支援システムを再整理し、これらシステムの限界についても考察することが肝要である。

課題 2
アドバイス

スクーリング（対面の演習）では「高齢者、ひとり親、傷病・障害者、住所不安定・ホームレスなど」の世帯を取り上げ、それぞれの世帯について、制度論およびソーシャルワーク・アプローチによる支援

の実際と活用を、自身の実践に照らし検討した。そのうちの1つの世帯を取り上げて、ソーシャルワーク・アプローチによる支援の枠組みと支援の際の留意点について自身の考えを述べること。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
1	格差と拡大する貧困概念に関する理解	・格差 ・絶対的貧困 ・相対的貧困、相対的剥奪 ・社会的排除 ・ケイパビリティの欠如	各種格差と多様な貧困の概念を整理するとともに、それぞれの特徴と関係性について学ぶ。
2	貧困状態にある人の生活実態と生活環境はどのようなになっているのか	・高齢者世帯 ・傷病・障がい者世帯 ・ひとり親(母子)世帯など	なぜ貧困が生じるのか、そして経済的困難さは何をもたらすのかについて、リスターなどの理論を参考にしながら考察する。
3	社会は貧困をどのようにみているのか	・人権と尊厳の尊重 ・自己責任論と社会責任 ・貧困の文化論 ・スティグマ	貧困に対する価値観の変容についてまとめるとともに、人権と尊厳の重要性について再確認する。
4	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか①	・生活保護制度 ・ラストセーフティネット	ラストセーフティネットとして生活保護制度の仕組みと諸問題について、「最低生活の保障」と「自立の助長」の視点から理解する。その際、自立は「経済的自立」「社会的自立」「日常生活自立」など多様な意味があることも理解する。
5	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか②	・生活困窮者自立支援制度 ・第2のセーフティネット	第2のセーフティネットとしての生活困窮者自立支援制度について、「救貧」と「防貧」の視点から課題も含めて理解する。
6	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか③	・生活福祉資金貸付制度 ・公営住宅 ・無料低額診療事業 ・無料低額宿泊所	生活保護制度や生活困窮者自立支援制度以外の貧困に対する施策について、役割と関係性について学ぶ。
7	貧困に対する諸施策にはどのようなものがあるのか④	・ホームレスの自立の支援に関する特別措置法	日本でのホームレスの意味と、対策の一つとしての時限立法である「ホームレスの自立の支援に関する特別措置法」の内容と特徴について学ぶ。
8	貧困に対する支援における関係機関と専門職の役割	・福祉事務所など	福祉事務所などの機能と現業員および査察指導員の役割と関係性について整理するとともに、現業員の福祉労働の二重性についても学ぶ。
9	「自立」と「自律」の視点から貧困に対する支援に考える。	・自立(就労自立・日常生活自立・社会生活自立) ・自律	「自立・自律」を支援するとは何か、ここでは「自立」と「自律」の相違と関係性を踏まえつつ、それぞれの支援の特徴について学ぶ。
10	生活保護制度を活用した支援の実際	・相談援助活動 ・自立支援プログラム	自らの実践のなかから生活保護における相談支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
11	生活困窮者自立支援制度を活用した支援の実際	・自立相談支援機関 ・必須事業と任意事業	自らの実践のなかから生活困窮者自立支援制度における自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
12	低所得者に対する支援の実際	・生活福祉資金貸付制度 ・公営住宅 ・無料低額診療事業 ・無料低額宿泊所	自らの実践のなかからたとえば、新型コロナウイルス感染症拡大により脚光を浴びた生活福祉資金貸付制度を通じた自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。

	学修のテーマ	学修内容(・キーワード)	学びのポイント
13	住居不安定者・ホームレスの自立支援の実例	・ホームレスの定義 ・ホームレスの実態に関する全国調査	自らの実践のなかから生活不安定者・ホームレスに対する自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
14	精神障害者に対する支援の実例	・社会生活適応訓練事業	自らの実践のなかから精神障がい者に対する自立支援の実例を挙げ、支援の構造と問題点について考察する(経験的事例がなければ、文献を参照してまとめること)。
15	多機関・多職種などの連携の重要性	・多機関・多職種 ・住民、企業との連携 ・地域づくり ・参加の場(居場所)づくり	まとめとして、貧困支援として多機関・多職種の連携の重要性を学ぶ。また、格差の意味や多様化する貧困概念の拡大を踏まえ、現行の支援の諸施策の概要と対応の限界について述べなさい(「レポート課題」の課題1に相当)。

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題(学修時間目安: 35時間以上)

「在宅学修15のポイント」の1～14までを学修し、それぞれ300～400字程度にまとめる(対面の演習の1週間前までに提出)。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	戦後日本における貧困の「かたち」がいかに変容したのかについて講義する。受講生は、戦後における貧困の変容について理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
2	「ポーガムの貧困論」の視点から日本の貧困の実態について講義する。受講生は、その貧困の実態を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
3	「見える貧困」のみならず「見えにくい貧困」をとらえる視点の在り方について講義する。受講生は、「見えにくい貧困」をとらえる視点を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
4	「コロナ禍」における貧困・生活困窮者支援の多様化と限界について講義する。受講生は、「コロナ禍」が貧困へ及ぼす影響を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
5	「自立支援」という政策目標の功罪と「自律」との関係性について講義する。受講生は、自立支援と自律の関係を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
6	貧困・生活困窮者支援における「公的支援」と「民間支援」の関係性について講義する。受講生は、「公的支援」と「民間支援」の関係性を理解し、確認テストに解答する。	オンデマンド
7	「高齢者世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実例と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
8	「ひとり親世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実例と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
9	「傷病・障害者世帯」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実例と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践経験に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習
10	「住所不安定者・ホームレス」について、制度論及びソーシャルワーク・アプローチによる支援の実例と活用を、様々な参考文献から見られる事例又は自身の実践に照らし検討する。その際にはグループワークなどを用い、理解を深める。	対面の演習

(3) スクーリング事後課題(学修時間目安: 30時間以上)

「レポート課題」の課題2について、「アドバイス」の課題2を参考にして、4,000字程度にまとめること(受講年度の最終レポート受付日までに提出。当年度の締切日を確認すること)。

■評価の方法・基準

- ・課題1レポート（15%）、課題2レポート（20%）
- ・スクーリング（事前課題15%、全スクーリング50%）

■参考文献（＊印＝大学から送付される必読図書）

- 1) 朝比奈ミカ、菊池馨実『地域を変えるソーシャルワーカー(岩波ブックレット)』岩波書店、2021年
- 2) 阿部裕二監修『ケアマネ、生活相談員、生活支援員のための社会保障制度がわかる本』ナツメ社、2021年
- 3) 阿部裕二責任編集『貧困に対する支援（第2版）』弘文堂、2026年
- 4) 岩田正美『貧困の戦後史－貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房、2017年
- ＊5) 金子充『入門 貧困論』明石書店、2017年
- 6) 酒井正『日本のセーフティネット格差－労働市場の変容と社会保障－』慶應義塾大学出版会、2020年
- 7) 佐藤康仁、熊沢由美『格差社会論 第3版』同文館、2023年
- 8) 「貧困研究」編集委員会編『貧困研究』(各号) 明石書房
- ＊9) 椋野美智子編『福祉政策とソーシャルワークをつなぐ』ミネルヴァ書房、2021年

【BPシラバス】 特別研究講義Ⅰ (公開講座)	授業形態		時間数	単位数
	SR		12時間	1単位
	担当教員	大石 剛史・竹之内 章代・庄子 清典・ 野田 毅・田中 伸弥・小渡 加依		

■受講する時の留意点（注意事項）

- ※所属する社会福祉法人があり、福祉現場での実践の経験があること（経験がないと演習や実施報告の課題が作成できない恐れがあるため）
- ※現場でのプランを検討したり、実施したりすることが課題として求められているため、それらが可能な立場にあること

■授業のテーマ

地域の福祉課題解決に貢献する福祉等施設の公益活動～人も資金も集まり社会に役立つ「打ち手」の創出と展開

■授業の目的

1. 社会福祉等事業の経営者や公益事業担当者、法人におけるソーシャルワーカー等職員が、有効な地域公益事業の実践理論と方法を共有することができる。
2. 自らが所属する法人等における公益的な取組を見直し、より有効な地域貢献事業を計画し、法人内での共有から実行、さらにその効果や成果の検証ができる。

■到達目標（学修成果）

1. 社会福祉事業において、公益事業の必要性和有効な理論について考察を深め、具体的な方策を提案することができる。
2. 社会福祉法人に求められる使命を理解し、法人の運営や人材育成等について、ソーシャルワーク理論や実践から考察することができる。

■授業の概要

2016年改正社会福祉法において、社会福祉法人の公益性・非営利性を踏まえた「地域における公益的な取組」の実施に関する責務規定が創設された。さらに、2020年の改正では地域共生社会の実現を目指した包括的支援体制の構築が謳われている。そこでこの講義では、社会福祉法人に求められる「地域に根ざした公的事业」実施にあたって必要となる理論と好事例を講義から、さらにワークショップを通じて具体的な実践方法を学ぶ。これらの実践と学びが、法人での人材確保や経営の安定、地域貢献につながることを実感できる講義となることを期待する。

■授業の進め方と方法

この講義は、必要に応じて「オンデマンド」「オンライン」「対面」あるいは「オンライン+対面」など、授業形態の工夫をしながら進めていく。講義の構成としては、講義を通じて「実践理論」や「好事例」から学び、さらにワークショップ形式による「事業計画の立案」、インターバルにおいて「事業計画の実施とその成果」についての報告を実施する。

■成績評価の方法と基準

各回の授業での成果物30%、演習等への参加度30%、最終レポート40%

■課題へのフィードバック

課題については、授業中にフィードバックをします。

■テキスト

講師作成資料を配付

■授業計画 ※宮城県社会福祉法人経営者協議会等との連携（同協議会等と協議を重ねて授業内容を編成）

第1回～第8回は2026年8月の4日間に集中講義（後日ご案内）、

第9回・第10回は同年12月の1日の集中講義（後日ご案内）

	テーマ	内 容
第1回	オリエンテーション（庄子・野田・田中・竹之内） 総論1 社会福祉法人における公益事業の取り組みについて（法的根拠や背景、法人における考え方・方針と事業展開）	この講義の進め方についての確認を行う。 地域における公益的な取組が実施される背景と社会的意義・役割、現在の取組み状況を共有する。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第2回	総論2（大石・竹之内） 法人をとりまく地域課題の分析と抽出、課題解決に有効なプログラム開発と評価の方法	社会福祉法人等が取り組む有効な地域公益事業の実践理論を学ぶ。ニーズ把握から打ち手の創出、計画の策定、モニタリングや検証等の方法論について学ぶ。 ※実務家教員による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第3回	実践事例報告1（野田・小渡） 社会福祉法人における公益事業の取組み	社福）東北福祉会の取組み ※実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等からの事例報告等による授業及び企業等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第4回	実践事例から何を学ぶか1（大石・竹之内） 「プログラム開発と評価」の視点から実践事例の分析・検討と共有①	「プログラム開発と評価」の視点から実践事例報告に対する振り返りと、参加者の各自の実践との関連性の検討と共有を行う。 ※実務家教員による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第5回	実践事例報告2（田中） 社会福祉法人における公益事業取組み	社福）ライフの学校の取組み ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第6回	実践事例から何を学ぶか2（大石・竹之内） 「プログラム開発と評価」の視点から実践事例の分析・検討と共有②	「プログラム開発と評価」の視点から実践事例報告に対する振り返りと、参加者の各自の実践との関連性の検討と共有を行う。 ※実務家教員による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（内容に沿って受講生を含めた意見交換を実施）
第7回	演習1（大石・竹之内・野田・田中） 参加者の各自実践の「打ち手」の開発・創出、事業実施計画の策定	これまでの講座を踏まえ、各自組織における公益的取組みについて分析し、見直しと計画の策定を行う。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）
第8回	演習2（大石・竹之内・野田・田中） 開発・創出した「打ち手」と事業実施計画の報告・全体共有	各自組織における「打ち手」と実施計画を報告し、ディスカッションを行う。講座全体を振り返り、今後の課題とあり方について全体共有する。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）

	テーマ	内 容
第 9 回	演習 1（大石・竹之内・野田・田中） フォローアップ・実践報告：各自組織における実施状況の報告	実施計画に基づく各自組織の実践状況を報告し合い、意見交換を行う。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）
第10回	演習 2（大石・竹之内・野田・田中） 講評 （フィードバック）「プログラム開発と評価」の視点から各自組織の実践を総括	各自組織の実践状況に対して、意見交換の結果を踏まえてフィードバックし、講座全体を振り返る。 ※実務家教員・実務家による授業 ※社会福祉法人等との連携（※社会福祉法人等と協議を重ねて授業内容を編成） ※双方向（少人数に分かれてグループディスカッションを実施）

■最終レポート課題

8月の集中講義・演習において作成した「実施企画シート」に基づいて9～11月に実践現場での取組みを行い、その実施状況を「フォローアップ課題シート」にまとめて提出する。この実施状況に基づいて、「実施企画シート」の修正案を提出すること。また、講義全体を通じて、具体的にどのような学びをし、その学びを実践活動にどのように活かすかについて、レポートにまとめる。

■教員への質問・相談

授業終了後もメール等で受け付ける。

■備考

第9回・第10回のフォローアップ講座（2026年12月）では、企画案（「実施企画シート」）に基づく実施状況を「フォローアップ課題シート」にまとめると共に、8月に作成した「企画シート」の修正案を作成する。

2023～実践事例検討とスーパービジョン	単位数	履修方法	配当学年
	2単位	SR	1・2年
	担当教員	田中 尚・竹之内 章代	

■授業のテーマ

福祉実践現場での事例の検討を行いながら、実践活動の構造、その中で求められるソーシャルワークの価値、知識、介入方法と技術の明確化を図り、教育的、支持的、管理的な視点からのスーパービジョンを行う。

■授業の目的

社会福祉の実践事例検討を学ぶことにより、事例の理解を深め、ソーシャルワーカーとしての理論に基づいた実践力を向上させる。加えて、スーパービジョンを実施することにより、受講者の「専門職としての自己」とその実践への省察を深め、高度な実践力の定着を図る。

■授業の到達目標

1. 社会福祉実践における実践事例検討を、ソーシャルワーク・モデルや理論の生成に至る方法の一部として位置づけ、それを応用し、新たな知見を見いだす試みを実践することができる。
2. スーパービジョンを受けることで、自らの実践力を高めるとともに、その根拠を説明することができる。

■授業の概要

本授業では、実践事例検討とスーパービジョンにより、社会福祉専門職としてのより高度な実践力の体得を目指す。ここでは社会福祉現場での事例を、専門的知識や専門的技術、さらにソーシャルワークの価値・倫理をベースに検討する。スクーリングでは、まず実践における事例検討とスーパービジョンの意義や目的を理解すること、さらに実践を支える専門的知識や技術、倫理について学ぶ。これらの基本的な視点を学んだ上で、さまざまな実践分野からの実践事例を用いて、受講者とともに検討を行う。検討の中から導き出された実践や研究的な視点を、グループスーパービジョンなどによって気づきを深め、より高度な実践力を獲得させることを目指す。

■在宅学修

(1) レポート課題

課題 1	(1-1) 実践事例研究の理論と枠組みについてまとめなさい。 (1-2) 実践事例提出可能な受講者については、実践事例を様式に添ってまとめなさい（対面講義当日2部持参し提出すること）。※様式はオンデマンド「資料ダウンロード」よりダウンロードしてください。 (2) スーパービジョンの理論と方法についてまとめなさい。		
	◆提出物と締め切りについて ・全員提出 ・実践事例提出可能な方	(1-1) と (2) (1-2)	提出締切：対面講義の前日 提出締切：対面講義当日（2部持参）
課題 2 (事後課題)	この授業を通して気づいた、より高度な専門職としての自分をどのように考えるのか、その上での自身の課題と、その対応方法をまとめなさい。		

【要確認】在宅での印刷教材等による学修の報告となる「レポート課題」の他に、オンデマンドを含むスクーリングでは「スクーリング事前課題」「スクーリング事後課題」が設けられています。スクーリング課題（予習・復習）がレポート課題1・2に相当する場合、それとは別に設けられている場合があります。この後に記載のスクーリングの項の各課題についても確認してください。

(2) アドバイス

課題1 アドバイス

テキストなどを用いて、実践事例検討とスーパービジョンの枠組みをしっかりと理解したうえで、スクーリングを受けられるよう準備をしましょう。提出されたレポートは授業の中で添削指導します。

課題2 アドバイス

この授業を通して気づいたより高度な「専門職としての自己」の課題と、その解決方法をまとめましょう。ソーシャルワーク専門職としての自己を確立していく上で、自身の実践についての理解を深めるとともに、個人としての自己理解を深めていきましょう。

(3) 在宅学修15のポイント

	学修のテーマ	学修内容(キーワード)	学びのポイント
1	実践研究の基本的な考え方	実践、実践研究、反省的実践	実践研究とは何か、実践を通して研究とはどのようなことであるのかについて考える。
2	実践現場における実践研究の基本的な考え方	現場実践、実践研究、実践の質の向上	実践現場とはどのような場であり、そこで何をどのように研究するかについて考える。
3	事例報告の方法の基本的な考え方	実践事例報告の意味、事例報告の方法・様式	実践事例をどのように報告するのか、また、そのための方法・様式のあり方などを学ぶ。
4	事例検討の方法と基本的な考え方	実践事例の検討、検討の方法と基本姿勢・態度	実践事例をそのように報告し、検討するのかについて、その方法を学ぶ。
5	スーパービジョンの基本的な概念	スーパービジョンとその定義、意義、歴史	スーパービジョンの基本的な理解として、その定義、必要性、歴史などについて学ぶ。
6	スーパービジョン関係	スーパーバイザー、スーパーバイジー、関係	スーパービジョンにおけるバイザー・バイジー関係の重要性、その意味について多角的に学ぶ。
7	スーパービジョンの機能：管理的機能	スーパービジョンの管理的機能	スーパービジョンにおける管理的機能の内容とその意義について学ぶ。
8	スーパービジョンの機能：教育的機能	スーパービジョンの教育的機能	スーパービジョンにおける教育的機能の内容とその意義について学ぶ。
9	スーパービジョンの機能：支持的機能	スーパービジョンの支持的機能	スーパービジョンにおける支持的機能の内容とその意義について学ぶ。
10	スーパービジョンの方法	契約、形態、方法、効果評価	スーパービジョンの方法について、その準備、契約のあり方、方法などについて学ぶ。
11	スーパービジョンの実践：マイクロレベルのSV	マイクロレベルの実践とスーパービジョン	マイクロレベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
12	スーパービジョンの実践：メゾレベルのSV	メゾレベルの実践とスーパービジョン	メゾ（地域・組織）レベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
13	スーパービジョンの実践：マクロレベルのSV	マクロレベルの実践とスーパービジョン	マクロレベルの実践における管理的、教育的、支持的な機能について学ぶ。
14	スーパービジョンにおける留意点	スーパービジョンの効果、実施上の課題	スーパービジョンの効果と評価について多角的に把握する視点について学ぶ。
15	スーパービジョンの実施体制	スーパービジョンを行う環境、体制、基本要件	スーパービジョンを実施するうえでの環境要件、体制などについて学ぶ。

■スクーリング

(1) スクーリング事前課題（学修時間目安：10時間以上）

1. 初回スクーリングの事前課題：テキストを読み、実践事例研究の理論と枠組みを把握しておく（5時間程度）。
2. 5回目スクーリングの事前課題：テキストを読み、スーパービジョンの理論と方法について理解しておく（5時間程度）。

(2) スクーリング授業計画

	授業の内容	授業の方法
1	事例検討とは何か（事例検討の定義や枠組みについて知る）	オンデマンド
2	事例検討における記録（事例策性に必要な記録について学ぶ）	オンデマンド
3	事例検討における倫理（事例作成についての倫理や研究倫理について学ぶ）	オンデマンド
4	事例検討の実際（実践事例の検討課題を抽出し、実際に検討するための準備を確認する）	オンデマンド
5	スーパービジョンの理論と枠組み（スーパービジョンの理論と方法について学び、スーパーバイザーとして必要な基礎知識を知る）	オンデマンド
6	スーパービジョンの実際（認定社会福祉士制度において提出が必要な様式の説明なども含む）	オンデマンド
7	グループスーパービジョンの準備（グループ構成、取り扱う事例、メンバーの波長合わせなどを行う）	オンデマンド
8	実践事例検討の実際①	対面
9	実践事例検討の実際②	対面
10	実践事例検討の実際③	対面
11	実践事例検討の実際④・総括（これまでの学びのまとめ）	対面
12	グループスーパービジョン①：スーパービジョンの基本理解	対面
13	グループスーパービジョン②：スーパービジョンの展開	対面
14	グループスーパービジョン③：スーパービジョンの実際	対面
15	グループスーパービジョン④：総括（これまでの学びのまとめ）	対面

(3) スクーリング事後課題（学修時間目安：10時間）

この授業を通して気づいた、より高度な専門職としての自分をどのように考えるのか、その上での自身の課題と、その対応方法をまとめなさい（レポート課題2に該当します）。

■評価の方法・基準

- ・スクーリングの参加度（25%）、プレゼンテーションや取り組む姿勢（25%）
- ・課題2レポート（50%）

■参考文献（※印＝大学から送付される必読図書）

- 1) 岩田正美他編（2006）『社会福祉研究法：現実世界に迫る14レッスン』有斐閣アルマ
- 2) 渡部律子（2007）『基礎から学ぶ気づきの事例検討会：スーパーバイザーがいなくても実践力は深められる』中央法規出版
- 3) 野口定久他編（2014）『ソーシャルワーク事例研究の理論と実際：個別援助から地域包括ケアシステムの構築へ』中央法規出版
- 4) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟監修（2015）『ソーシャルワークスーパービジョン論』中央法規出版
- * 5) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟監修（2023）『実践ソーシャルワーク・スーパービジョン』中央法規出版